



運命の出逢い

— 完結編 —

23期 KIMI ORR

運命の出逢い（第三部）

23期 KIMI ORR

♡ 初めてのデート

あれから2週間ほどしてJohnから電話がかかってきた。12月10日頃であった。たぶんナンシーに何回も言われて電話されたのだろうと思い、その彼の心情を考えて断るべきではないと判断した。

John 「土曜日は何をしているの」

Kimi 「図書館に行きます」

John 「じゃ図書館で会おう」



待ち合わせは午後からだったが、その日いつものように大きなカバンをもって図書館に出かけた。

待ち合わせの時間きっかりに彼は現れた。しばらくそこで話をした。というよりも彼が一方向的に話して、私が彼の問いに答えていたという風だった。

彼は今、離婚中で5歳の娘が一人いるといった。アメリカ人の“良さ”（気質）を垣間見た様な気がした。言いにくいことを最初にスパッと言われると自分の反応を表現する間がなく、相手のそんな言葉を発した勇気を率先して印象深く感じさせるものなんだと思った。心がオープンであることはネガティブなことでも往々にしてポジティブに変えていく力があるのかもしれない。私の大きなカバンを家に戻そうということで一緒に下宿に戻った。服を着替える間、彼は外で待っていてくれた。そして一緒に出掛けた。

レストランに行ったとき、彼は私の腕時計を見て、

John 「その時計は誰の時計？」

Kimi 「兄の時計なんです」

時計に関する会話はそれだけだった。そこを出てまだ外は明るかった。この辺りは海辺で美しい「17マイルドライブ」があり、「Fisherman's Warf」、そしてスタインベック小説「Cannery Row」がある。（脚注③）

そこにはメリーゴーランドがあり、一昔前の汽車が展示されていたり、多くのアトラクションが集まっていて、いつも観光客でにぎわっているようだ。3か月以上もモントレイに住んでいて、私の住んでいるところから、そんなに遠くないのにそのような存在すら知らなかった。何もかもが私を魅了した。

そんな街中をどこまでも歩いた。程よい頃にもう帰るのかなと思ったら、バーに案内してくれた。に入った途端、さすがアメリカのバーだと思った。天井が高く、高い壁の上はステンドグラスだった。広いバーの周りの壁にはワイン、ウイスキーと色とりどりの飲み物が並んでいた。それらのケースがカラフルで人の目をとらえた。彼の行きつけのバーなのか、バーテンと親しく話していた。彼の振る舞いをみて、落ち着き、浮わついているような振る舞いはなかった。30歳は超えていると見た。ところが私より5つも6つも若かった。

John 「君は25歳くらいかなと思っていたんだよ」

と笑った。そして私の手の上に自分の手のひらを置き、軽く握りしめた。時はもう10時を過ぎていた。私を下宿まで送ってくれた。別れ際に私の手にキスをして、

John 「素晴らしい夜だったよ。有難う。また連絡するよ」

彼は私に右手を軽く上げて去っていった。ドアを閉めた途端、今まで経験したことのない満足感というのか感動

というのか言葉に表現できない叫びたいような満たされた気持ちで充満していた。彼は優しかった。彼と横になって歩いているときも、さっと私の手を取り、恋人のように歩いた。この素晴らしい経験を誰かに話さずにはいられなかった！

タラップ先生の授業が終わった時、

Kimi 「先週末、私、すばらしいデートをしたのよ」

タラップ先生 「そうなの、それじゃ、結婚するかもしれないね」

Kimi 「それはわからないけど、でもデートしてこんな気分になったのは初めてよ。王子様が白い馬に乗って私に会いに来たような気分には酔いしれてるわ」



脚注③

◆「17マイル道路」

カリフォルニア州、モンレー半島のペブル・ビーチからパシフィック・グローブを抜ける、風光明媚な道路です。景色の多くは海岸線で、そのほか有名なゴルフコースや邸宅、素晴らしい景色が広がっています。

◆「フィッシャーマンズ・ワーフ」

モンレー半島の北側の付け根に位置する港町です。港に突き出した桟橋周辺のフィッシャーマンズ・ワーフ（シーフード・レストラン）や土産物のショップがあり、観光客で賑わっています。桟橋からはオットセイやラッコの泳ぐ姿を間近に見ることができます。今でも古い缶詰工場の建物が残っています。

◆「キャナリー・ロウ (Cannery Row)」

カリフォルニア州モンレーにある海岸沿いの通りで、かつてはイワシの缶詰工場が並んでいた。現在は閉鎖。通りの名は、それから由来して「缶詰通り」の意、ジョン・スタインベックの小説『キャナリー・ロウ』（1945年）によって、世界的に知られるようになった。出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』



♡ 予期せぬクリスマスプレゼント

Johnは軍隊の語学学校で韓国語を学んでいる。学校が終われば時間のある限り、私と一緒に時間を過ごした。今まではテープを聞いたり、エッセイを書いたり、本を読んだり、受け身型の学びから、Johnと私の会話が主体になってきた。週末も図書館に行くことなく彼と街を歩き回った。彼は車を持っていなかった。離婚した奥さんに全て置いてきたという。

クリスマスも近くなり、Johnがフロリダに帰る日がやってきた。フロリダに立つ前の日にレストランで二人で落ち合いクリスマスを祝った。彼はそんなに大きくない四角い箱に真っ赤のリボンを付けたプレゼントを私に手渡した。なんだろうと早く見たい気持ちを抑え、丁寧にテープを取るとき包み紙が破れないように注意しながら、その包みを開いた。

“腕時計！” 驚きで言葉が出なかったどころか、息が止まりそうだった。彼はまるで私の心のうちを知っているかのようであった。



♡ Do not Change your mind ! (心変わりするなよな！)

翌日彼は『1月3日に戻る』と言って去っていった。彼のことを思いながらも、クリスマスの準備やらで、気ぜわしく日々が過ぎ去っていった。不可能な願いだと思いながら、もし彼が『New Year's Eve Party』のために戻ってくれたらどんなに素晴らしいだろう！私の思いがまるでフロリダまで聞こえたかのように12月30日の夕方、けたましく電話が鳴った。

John 「いま戻ってきたところなんだ。2時間ほどしたらそちらに行くからね」

Kimi 「うっそお～！」

胸が高鳴り、信じられなかった！これは本当なのだろうか。彼に会った時、

John 「クリスマスイブに母親とダンスをしたがとても踊れなかったよ」

と言いながら、すでに購入したPartyのチケットを私に見せた。嬉しかった！

『New Year's Eve Party』は、私は初めてである。アメリカ人の若者は盛装して、12月31日のEVEはワインを飲み、ダンスをし、お祭りのごとく子供のように笛を鳴らして楽しむ。過ぎ去った日の出来事を忘れ、来る年に希望を託す。12時近くになり突然“蛍の光”の音楽が聞こえてきた。聞きなれているだけに、すんと心中にはまり、鼓動をくすぐられるような感動を覚えた。うわ、そうなんだ、蛍の光は卒業式に歌う歌だと思っていた。こういう時にきく蛍の光はまた別の面影がある。

華やかで、ジョイフルだ！涙は新年を迎える感動に向けられていた。
12時きっかり、新しい年を迎え、あちこちでシャンペンが開けられ、祝福の乾杯であった。信じられない、素晴らしい New Year's Eve Party であった。そんな酔いがまださめない頃、1月3日に彼の離婚が成立。私は彼のプロポーズを待った。1月8日彼からプロポーズがあった。

John 『 You know, marry me! (ねえ、結婚しよう！) 』

夕方、あたりは少し薄暗かった。もう使われていない線路の横にベンチがあり、その後ろ側は樹々で囲まれていた。ここに座ろうと喋ってすぐのことであった。『 Do not change your mind! 』笑いながら、立ったままの姿の私を高く抱き上げた。デイトを初めて1か月も経っていなかった。

🍀 終わりに

結婚後、二人の娘“奈緒美”と“えみりに”恵まれた。奈緒美は大阪弁を流暢にしゃべった。「あのね、あんたね」面白可笑しく妹のえみりにしゃべりかけながら、二人で大声で笑っていた。それを私がもらい笑いしていたのを覚えている。不幸にして奈緒美は6歳10か月で他界した。喉頭がんであった。

彼女の死は私を打ちのめした。心のうちに秘めている娘を愛きる（脚注④）ことで生き抜こうとした。一人残されたえみりのことを思い、養女“久美”を迎えた。あれから30年以上にもなる。久美も33歳になり、離婚して、6歳になった息子と近所に住んでいる。この孫のおかげで、我が家は笑いが絶えない。

“恋愛は心の錯覚である”と聞いたことがある。されど改めてこのエッセイを綴りながら。この思い出の人と今も一緒にいることを嬉しく思った。2022年8月30日で結婚43年目になる。



(脚注④ 愛きる) 娘を片時も忘れないで思い続けること